

# 博覧会と都市の空間編成

## —京都市岡崎における「モダン」と「伝統」へのまなざし—

小川 実紗

本研究では、都市の構築プロセスについて空間編成とイメージ形成の両面から検討する。それを解き明かすうえで、京都市左京区岡崎を事例に考察を行う。

京都についてしばしば「日本の伝統文化の宝庫」といった語り方がされる。京都は「日本の故郷」であるという認識は、現在では多くの日本人に受け入れられているものだろう。しかし、近代以降の京都を歴史的にみても、東京・大阪に遅れまいと近代化を目指しつつ、それらの都市との差異化を可能にする地域アイデンティティのひとつとして「伝統」を再発見していったという面がある。にもかかわらず、いつから、どのようにして「京都」を通して「日本」が語られるようになったのか。その中で京都の「伝統」イメージはどのような役割を果たしてきたのだろうか。これらのことを明らかにするため、一般的に近代以前から受け継がれているものと考えられる「伝統」という概念に加え、近代を象徴し未来志向なイメージを表す「モダン」という分析視角も加える。近代化の時期に再発見された近代的な「伝統」は「モダン」と切り離して考えることができないためである。

京都の近代における「モダン」と「伝統」の二つのイメージが空間に表れている場所であるという理由から、京都市左京区岡崎を研究フィールドに設定した。岡崎は平安神宮があることで、観光京都の「歴史都市イメージ」の一端を担う観光地として知られている。一方で、その周辺に文化施設が集合している地域でもある。しかし、岡崎の歴史をさかのぼってみると、明治の中頃まで野菜畑と雑木林が混在する地帯であった。それが、1895 年の第四回内国勸業博覧会と、同時開催の平安遷都千百年記念祭の開催用地として開発が始まり、地域は激変する。平安神宮はこの博覧会のパビリオンとして創られたものであった。その後岡崎の地では常設博覧会施設が創られ毎年京都博覧協会主催の「京都博覧会」が開催されるなど、博覧会のメッカとなっていく。

それをうけて、本研究では、博覧会により作り出された岡崎の都市空間が、その跡地利用を含めてどのように変化していくのか、その中で「モダン」と「伝統」はいかに絡み合うのかを検討する。

従来の研究では、博覧会による空間編成の通時的な考察は十分になされてこなかった。また、博覧会が生み出す「モダン」へのまなざしは先行研究において明らかにされてきたが、「モダン」と「伝統」の関係性を解き明かしたものは見当たらない。

近代とともに登場した「まなざしのメディア」である博覧会の開催を契機として発見され、京都における近代化の象徴ともいえる場所であったはずの岡崎が、現在のような平安神宮を中心とする「歴史都市」イメージと、「文教エリア」としての性格を併せ持つ空間になるまでの過程を、岡崎の開発が始まった 1880 年代後半から、現在の岡崎の様相が大方整う 1950 年代前半までの時期を中心に、空間編成とイメージの両面から考察する。これを明らかにすることで、京都が「日本の故郷」となるに至った過程を「モダン」と「伝統」の関係性から考察することが可能になると考える。こうした問題意識の下に行った各章の考察の要約は以下の通りである。

第 1 章では、博覧会がいかに地域を発見、開発したのかについて、第四回内国勸業博覧会による岡崎の開発を事例に考察する。ここに岡崎が「モダン」なイメージを持つ近代都市として誕生した契機を見ることができる。

第 2 章では、第 1 章と同時期の岡崎をもう一つの視角である「伝統」から考察する。第四回内国勸業博覧会と同時開催された平安遷都千百年祭という「伝統」のイベントもまた岡崎という空間を特徴づけることになる。博覧会が「モダン」のイベントであるとするならば、「モダン」な博覧会により構築される「伝統」とはいかなるものであったのかを考察する。

第 3 章では、京都における博覧会の減少、縮小に伴い岡崎が単なる博覧会場ではなく新たな性格を見出していく過程について明らかにする。つまり、博覧会による地域開発の次の段階の空間編成を描く。博覧会開催後の岡崎において博覧会が残っていた遺産はどのように活用され、新たな意味が見出されたのか。博覧会跡地の利用について、博覧会開催からまだ日が浅い時期から、日本が戦時体制に突入していく時期までをみていく。

第 4 章では、終戦直後から始まった岡崎の三つ目の大きな変革の時期を扱う。岡崎の占領期である。また、この時期には岡崎公園は博覧会場としての機能をほとんど失うと同時に、平安神宮が進駐軍関係者により観光のまなざしの対象となっていく。これはアメリカから向けられるまなざしを京都が内面化していく過程をよく表している事例であるといえよう。結論を先走るならば、京都の「伝統」へのナショナルなまなざしが形作られたのはこの時期であり、そこには敗戦と占領の経験が絡んでいるのではないかと考える。

以上のように、本稿では、岡崎の都市空間形成過程を、空間とイメージの変化から分析する作業を行った。その結果、「モダン」と「伝統」という一見相反するようにも見える二つのイメージが相互に絡み合いながら、近代以降の「京都」アイデンティティを下支えし、「日本」とも「地方」とも

## 2016 年度社会学研究科修士論文タイトル及び要旨

異なる形で創られるプロセスを明らかにした。これをふまえて、京都の「伝統」を通して語られる「日本の故郷」イメージの形成と、それが持つ社会的な意味についても考察を試みた。